2006 年 7 月に、加古川の里山・ギフチョウ・ネットのメンバーとハチ高原で開催されたウスイロヒョウモンモドキ観察会に参加し、筆者も会員となっていた日本チョウ類保全協会の有志がボランティア活動で高原一帯のウスイロヒョウモンモドキ発生状況を調査している実態を目の当たりにして、炎天下の大変な作業に驚き、次回には自分も協力しようと決意する。翌 2007 年 7 月 7 日、妻に運転を頼んでハチ高原までのドライブでこの調査活動に参加。およそ 100m 間隔で草原に目印の旗が立ててあり、この旗を目印として分担区域をグループ分けし、1 グループ 2-4 名単位に分けた有志メンバーがそれぞれ分担して、見つけたウスイロヒョウモンモドキをネットインし、チョウの後翅裏にグループごとに色を変えたマジックペンを使って通し番号を書き込んでからチョウを放す。グループ中の記録担当者はマークした通し番号と、チョウを捕獲したときの状況：飛翔中かあるいは静止中か、オスかメスか、その新鮮度は、などをこと細かく手板に準備した記録用紙に記入してゆく。この日は天候が曇り空で、きつい太陽の照りつけがなかった分救われたはずなのだが、それでも背の高いススキなどが茂る斜面ブッシュに入り込んで、藪こぎをしながらの調査作業は体中からひっきりなしに噴出す汗をぬぐう暇もない、大変な重労働である。

翌日 8 日は一般の参加希望者を募ったチョウ観察会で、日本チョウ類保全協会メンバーは前日同様にマーキング調査をする者と、観察会への一般参加者に説明をする者とに分かれる。腰痛をかかえる筆者はさすがに連日の作業はきびしいので、説明担当を希望して妻と行動をともにする。2006 年には散策道路傍の斜面にむき出しとなった地肌地帯に吸水目的で群れるウスイロヒョウモンモドキをみることができたが、この日は天気が良くなかったせいか、草むらに入り込んで驚かさないと飛び立ってくれない状況。続けて 2008 年の観察会にも妻と参加し、新調した SONY のフルハイビジョンビデオカメラ HDR-TG1 で存分にきれいな映像を確保した。

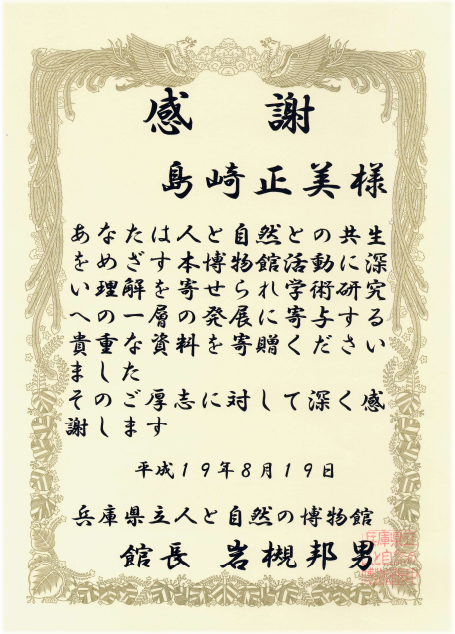
80706 ハチ高原 ウスイロヒョウモンモドキ

実は、このウスイロヒョウモンモドキとの初めての出会いは 1980 年 7 月 13 日、兵庫県砥峰高原である。このチョウがいるなどとは全く考えもせずに、家族でハイキングを計画。登山口の大河内村までは車でゆき、ニャンタとチャミーという 2 匹の飼い猫をつれてそこから高原までは約 2 時間の登り。広い草原の中央部に水の流れる谷筋があって、そばに松の木が立つ場所で昼食をとり、松の木の枝にネコをつかまらせて遊んでいたらネコが墜落したりする様を楽しんでいるうち、娘が、濡れたために乾かしていたクツの近くに見慣れないチョウがいるよ、と教えてくれる。ずいぶん小型のヒョウモンチョウだ。信州の霧が峰高原で乱舞するのをみたことがあるコヒョウモンモドキとそっくりで、図鑑からの知識でいま目のまえにいるチョウはウスイロヒョウモンモドキだと分かり緊張する。思いもしないチョウとの出会いに、がぜんその気になって周辺のススキが多い草原を探してみる。そして 1 頭だけ新たな個体を見つけるが、それ以上はあらわれず、ギンイチモンジセセリもいることを知っただけ。

山を降りる途中で犬をつれて上ってくるご家族と出会って挨拶を交わす。岩岡町在住の姫路昆虫同好会に属する近藤伸一さんで、ウスイロヒョウモンモドキに出会えたことを話して分かれるが、後に、兵庫県の蝶について地道な調査を継続されておられることを知る。その近藤さんが兵

Copyright© 2008- Soft House JUMP. All rights reserved.

庫県三田市の「人と自然の博物館」で、2007 年 4 月 22 日に日本チョウ類保全協会主催の「チョウが消えてゆく－絶滅の危機にあるチョウとその保全―」セミナーで「鉢高原のウスイロヒョウモンモドキと加古川のギフチョウの保護活動」という講演をされた際、筆者は砥峰高原で絶滅し

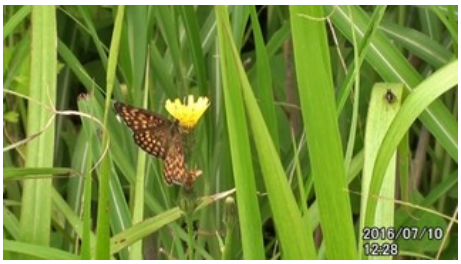


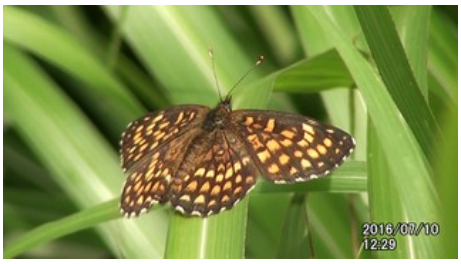
てしまったウスイロヒョウモンモドキとヒメヒカゲの標本を、個人で所蔵保管するより博物館で保管してもらうのが好ましいと考えて標本を持参、寄贈手続きに託す。公的機関のために手続きが必要だったようで、8 月になってようやく正式受理書状と感謝状が届く。砥峰高原にはそのあと 1981-82 年と続けて家族で訪問し、1982 年には高原の湿地帯にヒメヒカゲが発生していることもわかり複数個体を採集するが、ウスイロヒョウモンモドキはあまりに少なくなっている状況が気がかりで、路面で吸水中の個体を写真撮影しただけ。捕獲していないため、筆者に限れば上記寄贈標本が最後のものとなる。なお、寄贈した蝶標本は写真記録として手元に残すことができ、必ずしも標本の形で持たなくてもいいことを実感できたのは意義のあることだ。1981 年は大河内登山口から数百m上った急な左カーブ地点の右側にある大きなアワブキにスミナガシの幼虫がいたり、路傍のネムノキの小枝にキタキチョウの蛹が鈴なりにぶらさがっていたりして楽しめたが、中腹の路面一面にジガバチの一種が巣を作っていて 4-5m ほどはハチが低い位置でぶんぶん飛び回っており、子供やネコたちを抱きかかえて乗り切るしかないという思わぬ障害も経験した。実は 1982 年の砥峰高原訪問は、福知渓谷側から車で高原までのぼれることが分かって、大河内からの登山道ハイキングをやめており、アワブキでスミナガシがその後も発生してくれているかどうかわからない。砥峰高原一帯は秋のススキ原景観をアピールする目的で徹底した野焼きが実施され、そのことがウスイロヒョウモンモドキの継続発生に悪影響を与えた可能性を否定できなく、観光と自然保護を共存させることの難しさを痛感する。

Copyright© 2008- Soft House JUMP. All rights reserved.

July 10, 2016　ウスイロヒョウモンモドキ観察会

例年より一週間ほど発生が早く、本日のチョウ観察会で見られるかどうかが心配されたが、久しぶりに草原を飛ぶウスイロヒョウモンモドキに出会えて存分に撮影記録をとる。本日初の出会いは、求愛し続けるスレた♂とかたくなに拒む♀の姿。葉上でしょんぼりとする♂は、ふられて





もやむを得ないかと思わすくたびれきった姿。カメラ持参の多くの参加者に、よくぞきてくれました、とモデルを務めてくれた個体は、そこそこの別嬪さんで、背景に遠景をとりこむ構図を選ぶあいだもおとなしくしていてくれる。もういいよね、と飛び移ったのは低い位置の黄色い花で、この花での吸蜜タイムはあまりに短く、撮影チャンスを得られなかった人の方が多かったが、次にとまった草葉上はモデルとして引き立つ許せる位置。誰もが早く撮影したいと、被写体へと向けられるカメラの数の多いこと。読売 TV がドキュメンタリーとして放映する企画があるとのこ

とで、草原斜面や急な山道など、一般参加者と同じルートを 12kg もあるビデオカメラをかついで回る姿には敬服してしまう。「ウスイロヒョウモンモドキを守る会」が絶滅回避のために飼育

Copyright© 2008- Soft House JUMP. All rights reserved.

した幼虫を、食草のオミナエシを植栽した鉢から草原へと移した場所で、蛹にまで育った個体も観察させていただきなかには寄生されて穴の開いた残念な蛹もあって、自然界の厳しさを見せつけられる。その後も複数のウスイロヒョウモンモドキを観察でき、観察ルートの最後となる鞍部へと上がってきて、撮影チャンスが全くない元気よさで、すいすいと飛び去って行く個体を見送って山を下りる。

July 16, 2017　ウスイロヒョウモンモドキ観察会

例年より一週間遅い July 16、Facebook 友の K さんにお願いして車を出してもらい、息子さん、加古川の里山・ギフチョウ・ネット代表の竹内さんと 4 名でウスイロヒョウモンモドキの観察会に参加。「ウスイロヒョウモンモドキを守る会」の事務局長近藤さんから前日の調査 3 か所で発生を確認できたのは 6+1＋1 個体だけという寂しい状況説明のあと、小さな子供連れの複数家族など大勢の一般参加者と一緒に高丸山へと楽ではない登山道を登る。日照りがきついが、山岳特有の涼しい風が吹き抜ける鞍部草原に、シカ害防止柵で囲まれた草原でかろうじて 3 個体の飛翔を観察。オカトラノオで吸蜜する個体はまずまずの新鮮度で、神戸新聞記者たちと大勢で撮影記録を撮る。撮影位置を譲ってあげたくても、その動きで飛び立つこともあるので、実際に飛び立ってしまう時点までビデオ撮影 ON のままで動けない。何とか観察目的が果たせたとはいえ、2008-9 年頃の大発生時期を知っている身にはあまりに寂しい状況だ。

Copyright© 2008- Soft House JUMP. All rights reserved.